



阿南の春の草花『オキナグサ』

2023年4月10日

2, 3年生の皆さん、進級おめでとうございます。また、新入生の皆さん、入学おめでとうございます。その入学式では、同窓会長様・PTA 会長様、並びに多くの新入生の皆様方のご臨席賜り、無事入学式が挙行できまして、改めて厚く御礼申し上げます。

先週は、赴任後、諸会議・始業式・入学式とあり、新米の校長としては気の休まる間もなく過ぎていった一週間でした。1 2年前阿南高校に勤務してました頃、「綜合理科」という学校設定科目を持ち、阿南高校周辺の生物の観察を行ってましたので、当時を思い起こしながら校舎をでて春の草花を観てきました。オキナグサ、名前とは違って可憐な美しい花を咲かせています。名前の由来は、花が終わるとふさふさした銀花の房が翁のように見えるためこの名がついたと思います。



阿南の春の草花『シロバナタンポポ』

2023年4月11日

さすが阿南ですね。敷地内にシロバナタンポポの群落がみられます。(以前勤務していた時も、生徒と一緒に観察しました。) 野原や土手でよく見るタンポポは黄色のタンポポですが、シロバナタンポポと呼ばれる白い花を咲かせる種類もあります。

シロバナタンポポは日本にもともと生えているタンポポの一種(在来種)で、明治以降、外来種のセイヨウタンポポが入ってきたため、その数はかなり減っています。学校周辺にはシロバナタンポポだけでなく、カントウタンポポ、カンサイタンポポ、エゾタンポポなどの”在来種”も多く残っています。



阿南の春の草花『カタクリ』

2023年4月17日

先週の金曜日は、それぞれの学年で学年行事を行いました。1年生は親睦を深めるため阿南少年自然の家で「進路講話」「レクレーションとカレー作り」、2年生は修学旅行の予習も兼ねて「松代大本営・善光寺」へ研修旅行、3年生は進路別に講演を行いました。天気も良くそれぞれの目的も達成できたかと思います。お疲れ様でした。詳細は職員ブログをご覧ください。

さて、下の写真はなんだかわかりますか？



春の妖精と呼ばれる“カタクリ”です。先端の青い塊がカタクリの実なんです。

以前勤務していた頃は、4月の中旬に阿南高校周辺でカタクリの花を生徒と観察(選択科目の綜合理科)していましたが、残念ながら今年はサクラなどと同様開花も早かったため、花の状態では確認できませんでした。今年はこの写真でご勘弁ください。来年の春は早めに観察に出て、写真に収めたいと思います。





阿南の春の草花『ウツギ』

2023年5月1日

今日から5月ですね。

阿南高校のすぐ北側に流れる鬼渡沢川に、初夏を感じる小さい白い花がたくさん咲いています。



ウツギという低木樹の花です。名前の由来は、枝の中がストローのように空洞になっていて、空（うつ）ろな木からウツギと呼ばれています。

旧暦の4月（卯月）に花を咲かせることから「卯の花」とも呼ばれ、古くから万葉集でも詠まれています。



俳句の世界では、卯の花は春から夏への初夏の季語ともなっています。

卯の花と

いうと、豆腐を作るときできる大豆のしぼりかす＝おからを調理したのも卯の花っていいですね。

阿南の初夏の草花『シャガ』

2023年5月15日

学校のすぐ北側を流れる「鬼渡沢川」。その沢谷のやや湿った木陰に、白っぽい紫色したアヤメを小さくしたような花が咲いています。シャガです。

シャガは中国原産のようで、かなり古くから日本に入ってきた帰化植物だそうです。日陰の暗いところでひっそりと、蝶が舞うような美しい花を咲かせてます。また、三倍体（*）のため種子は作られず、茎が地下を這って繁殖し、たくさんの花を咲かせます。そのため「決心」「私を認めて」「友人が多い」が花言葉となっているそうです。

今年は4月中下旬から咲き始め、そろそろ花の季節も終わりに近づいています。

*三倍体：通常の生物は父親由来と母親由来の染色体を2セット持つ二倍体ですが、3セットもつ個体を三倍体といいます。（突然変異の一種です。）

秋に咲く「ヒガンバナ」（別名 曼珠沙華）も三倍体です。





阿南の初夏の草花『チゴユリ』

2023年5月12日

漢字で書くと「稚児百合」（稚児とは乳児、幼児のこと。）白く可愛らしい小さな花が、並んで咲いている姿が稚児行列に見立てたことから名がついたようです。ササに似た葉が違い違いに並んでいて、その先端にうつむくように1cmほどの白い花を一つ咲かせ、秋には黒い実をつけます。

こちら阿南高校周辺の林の中で見つけました。ユリの仲間ですがユリと違って球根ではなく地下茎で



繁殖する植物なので、群落で見られます。たまに写真（下）のように双子、ごく稀に三つ子も見られます。

初ホトトギス

2023年5月19日

「目には青葉 山ほととぎす 初鰹（がつつお）」江戸時代の俳人、山口素堂の俳句です。初夏の爽やかな青葉（若葉）が目映り、山からはホトトギスの鳴き声が聞こえ、初物のカツオが食べられる素晴らしい季節をあらわした俳句ですね。17日、18日と全国高等学校長協会の総会・研究協議会で大宮に行ってきたので、今日、3日ぶりに阿南高校へ出勤したのですが、車から降りた瞬間“トッキョ キョカキョク（特許許可局）”と、ホトトギスの鳴き声が聞こえてきました。自分にとっては今年初めての“初鳴き”でした。

人によっては“テッペンカケタカ（天辺翔たか）”とも聞こえますよね。このように鳥（生物）の鳴き声を分かりやすいように人の言葉や文字に置き換えたものを「聞きなし」といいます。ニワトリの“コケッコ”とかウグイスの“ホーホケキョ”、カッコウの“カッコー”などがそれです。

ホトトギスという鳥は、全長30cm近くある大きめの渡り鳥で、夏を告げる鳥です。姿形は「托卵」で有名なカッコウとよく似ています。「托卵」とは他の種の鳥（主にウグイスだそうです）の巣に卵を産みヒナ

を育ててもらい、一つの戦略ですが、ちょっとやな（ひどい）習性のことです。

さすがにホトトギスの写真は撮れませんでしたので、サントリの『日本の鳥百科』をご覧ください。

<https://www.suntory.co.jp/eco/birds/encyclopedia/detail/1490.html>



阿南の草花『スイカズラ』

2023年5月30日

“かずら（葛または蔓）”とはつる植物の総称で、みなさんがよく知っている“〇〇かずら”と名がつく植物といえば、夏にたくさんのオレンジ色の大きな花をつける「ノウゼンカズラ」が有名ですね。今回紹介するかずらは『スイカズラ』（吸葛）といい、花に甘い蜜があり「蜜を吸うつる植物」から名がつけられたと言われてます。

写真からもわかるように花の形が特徴的で、2つずつ並んで咲き、よく見ると5枚の花びらの内4枚は上にそり返り、1枚は舌を出したように垂れ、そして花の真ん中からめしべとおしべが突き出ており、小さいながらもとてもゴージャスな花です。（サイズは2cm程度）花色は白と黄がありますが、これは最初は白く咲き、翌日には黄色と変化していくためです。中には淡いピンク色した花も見られます。



常緑のつる植物で、冬でも耐え忍んで葉をつけているため、「忍冬（にんとう）」とも呼ばれています。





阿南の四季の植物『マタタビ』

2023年6月9日

飯田方面から阿南高校へ向かう国道151号線沿い、この時期一際目を引く植物があります。白い葉のつる性の植物「マタタビ」です。今ちょうど花の咲く時期（6月から7月）で、マタタビは葉を白くさせ、遠くからもとてもよく目立ちます。



肝心の花ですが、葉の裏側に隠れて咲き、一見分かりづらいです。そのためか、葉が白くなるのは花を訪れる虫たちの目印となっているのではないとも言われています。この写

真は学校の職員
駐車場脇のやぶ
に垂れ下がった
「マタタビ」の花
で、真下にまわっ
て撮影しました。
マタタビには雄
花だけをつける



雄株と両性花を付ける株があるそうで、この写真の花は中央に白いめしべ、そのまわりに黄色い黄色いおしべが見られますので両性花



ですね。やや大きめですが梅の花にも似ているため、夏梅



（ナツウメ）ともよばれているそうです。マタタビは実もつけ、その実の果実酒がまたたび酒となります。「猫にマタタビ」という諺（ことわざ）も有名ですね。大好物の例えとして使われます。ネコ科の動物はマタタビの匂いを嗅いだり食べたりすると、体を擦り寄せゴロゴロと転げ回ったりするそうです。

阿南の四季の鳥『アカショウビン』

2023年6月14日

この梅雨の時期、それも朝からしとしとと雨が降り続く中、阿南の谷間にアカショウビンの鳴き声が響いています。

以前勤務していた頃もこの時期、毎年アカショウビンの鳴き声を楽しみにしてましたが、今年も、本日、校長室からその鳴き声を聞きました。（自分にとってアカショウビン初鳴きです。）

アカショウビンはカワセミの仲間（カワセミ、ヤマセミ、アカショウビン）で、嘴（クチバシ）から体全体まで真っ赤（オレンジ色）な渡り鳥（カワセミ、ヤマセミは留鳥）です。そのため「火の鳥」とも呼ばれていますが、深い森の奥に生息していることもあり、（里では）なかなか姿を見ることはできません。実を言うと、鳴き声は毎年聞いてますが姿は見たことはないです。

姿に加え鳴き声もかなり独特です。「キュロロロロー」と、美しく透き通ったもの悲しげな鳴き声です。梅雨は湿度も高く鬱陶しい季節ではありますが、アカショウビンの鳴き声は梅雨ならではの楽しみでもあります。

下記のサントリーのサイトから姿・鳴き声（さえずり）をご覧ください。



日本の鳥百科ーサントリーの愛鳥活動ーHP

<https://www.suntory.co.jp/eco/birds/encyclopedia/detail/1376.html>

夏至の日と夏椿

2023年6月21日

今日は、1年で最も昼の時間が長くなる夏至の日でしたね。ちなみに、今日の（東京の）日の出は4:25、





日の入りは19:00とのことです。そんな夏至の日に、阿南高校の校門入ってのロータリーの植栽に「ナツツバキ」（夏椿）の花が、夏の到来を知らせるが如く美しく咲いています。



ナツツバキですが、ツバキ（椿）に似た花が初夏に咲くことから名付けられました。別名として「シャラノキ」（沙羅の木）とも呼ばれています。

似た名前の植物に「サラソウジュ」（沙羅双樹）があります。仏教の聖なる樹として、インドや東南アジアの寺院では沙羅双樹が植えられているそうです。沙羅双樹は南アジア・東南アジア原産のため日本の冬の寒さに耐えられず、日本の寺院では代わって沙羅の木（夏椿）が植えられてきたそうです。



沙羅双樹といえば、古典で習う平家物語の冒頭「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす……」を思い起こしますね。

阿南の四季の生物「オオムラサキ」

2023年6月30日



翅は青紫色に輝き、気品のある美しい蝶ですね。日本の国蝶「オオムラサキ」です。雄は写真の通り青紫色でやや小型（約10cm）ですが、雌は茶紫でやや大型（約12cm）です。

翅の表側ですが、関東型は黄色の斑点（写真）、関西型は白色の斑点、また、裏側は同じように黄色（関東型）と白色（関西型）となっているようです。（地理的変異と呼びます。）

ちょうど今の梅雨の最中がオオムラサキの羽化の季節（6月下旬から7月）です。

今回の写真も羽化したばかりだったのか、逃げることなく近距離で撮影できました。（ラッキーでした！！）

オオムラサキの生息場所は、九州から北海道までのほぼ日本全土生息していますが、エノキ、クヌギ・コナラの木が多い雑木林となっています。それは、幼虫時代はエノキやエゾエノキの葉を食べ、成虫となればクヌギやコナラの樹液を吸って生活しているためです。



少年時代カブトムシを採取に行くと、クヌギ・コナラの樹液にカブトムシと一緒にいるオオムラサキをよく見ました。

お隣の山梨県北杜市長坂町（諏訪と甲府の中間あたり）は、全国一のオオムラサキ生息地といわれ、そこには「オオムラサキセンター」があります。施設周辺には広大なオオムラサキ自然公園や、自然に近い状態でオオムラサキを観察できる生態観察施設「ひばりうむ長坂」もあるそうです。[北杜市オオムラサキセンター公式サイト \(http://oomurasaki.net/\)](http://oomurasaki.net/)